文京学院大学

＜発行日 2019年2月18日＞
Vol.24

文京学院大学　オピニオンレター

【特別対談】
ユニファイドスポーツ普及へ、スポーツを通して考える
「知的障害者と健常者が互いに歩み寄る共生社会の実現」

＜提言者＞

有森 裕子 （公益財団法人 スペシャルオリンピックス日本 理事長）

バルセロナオリンピック女子マラソン銀メダリスト、アトランタオリンピック女子マラソン銅メダリスト。2008年より公益財団法人 スペシャルオリンピックス日本 理事長、認定 NPO 法人「ハート・オブ・ゴールド」代表理事、スポーツマネジメント会社「RIGHTS.」特別顧問、国際オリンピック委員会(IOC)スポーツと活動的社会委員会委員、日本陸上競技連盟理事、他。2010年6月、IOC「女性スポーツ賞」を日本人としてはじめて受賞。同12月、カンボジア王国ノロドム・シハモニ国王陛下より、ロイヤル・モニサラポン勲章大十字を受章。

「スペシャルオリンピックス」とは、ジョン・F・ケネディの妹である故ユニス・ケネディ・シュライバーの提唱により、1968年に米国で始まった知的障害者のためのスポーツ競技活動。世界172カ国、約490万人のアスリートが参加し、4年に一度、夏季17競技・冬季7競技による世界大会が開催されている。日本では1994年から活動が始まり、現在は8,253人のアスリートと9,767人のボランティアが参加している(2017年末時点)。

伊藤　英夫 （文京学院大学 人間学部児童発達学科 教授）

臨床発達心理学や発達障害が専門。主な研究テーマは発達障害児の統合保育や自閉症児・者の補助・代替コミュニケーション、特別支援教育における自閉症児の指導など。米国エール大学 医学部フルブライト研究員、広島国際大学 人間科学部学部長などの経歴を経て現職。公益財団法人 スペシャルオリンピックス日本 理事。一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構 理事。臨床発達心理士スーパーバイザー資格認定委員会 委員長。著書に『特別支援教育における臨床発達心理学的アプローチ』(共著)ミネルヴァ書房(2006年)、『臨床発達支援の専門性』(共著)ミネルヴァ書房(2018年)など。

◆日本が目指すべき共生社会とは

文京学院大学の建学の精神は「自立と共生」です。創立者である島田依史子が95年前から提言していることであり、この精神は、本学で学ぶ学生のみならず、地域で生活する誰にも共通の理念になりうるものです。発達障害を専門に研究する、本学人間学部児童発達学科教授であり、スペシャルオリンピックス日本の理事を務める伊藤英夫は、日本が目指すべき共生社会とは「障害者が健常者に合わせるのではなく、障害者と健常者が互いに歩み寄る社会」であると考えています。2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されスポーツ全般に強い関心が高まる中、もう一つのオリンピックである「スペシャルオリンピックス」に着目し、スポーツを通して考える「共生社会」をスペシャルオリンピックス日本 理事長の有森裕子氏との対談の中で提言していきます。

◆知的障害者にスポーツの場を

伊藤　有森さんはスペシャルオリンピックス日本(SON)の理事長として積極的な広報活動に尽力されています。もともとどのようなきっかけでこの活動に賛同されたのですか。

有森　SONには2002年に東京で行われたナショナルゲームにドリームサポーターとして参加した時からの縁で、2008年から理事長を務めています。当時SONの理事長だった細川佳代子さん(現・名誉会長)からお誘いを受けた時はスペシャルオリンピックスについてほとんど知識がありませんでしたが、「スペシャルオリンピックスは知的障害のある人にスポーツの場を提供している組織なのよ」と最後に言われた一言が参加の決め手になりました。スポーツがすぐ身近にあった身としては、「提供する組織」がなければスポーツのできない人がいるというのがとてもショックだったんです。自分自身がスポーツの力をもらってきた人間なので、知的障害者の方々にも同じような経験をしてもらえるなら、ぜひお手伝いしたいとお伝えしました。

伊藤　スポーツ活動というのは社会参加の場でもありますが、障害を持っているとその機会に出会えない方も多い。成人になるとさらにそのチャンスは少ないといえます。オリンピアンである有森さんには、ごく普通にスポーツにアプローチできない人たちがいることがとても衝撃的に映ったんでしょうね。

有森　そうですね。ただ、SONの方からは「スペシャルオリンピックスはオリンピックともパラリンピックとも違う」と初めに言われました。その違いを分かりやすく感じたのは陸上競技を見た時のことです。2人だけの競争だったんですが、1人の選手が応援の声が聞こえるとコースを外れて観客に握手をしてから再びコースに戻る。そして、もう1人の選手もゴール手前で相手を待って一緒にゴールをするという場面に遭遇したんです。記録よりもハンディキャップに負けない心を大切にするスペシャルオリンピックスの精神とはこういうものなのだと体感しましたね。

伊藤　私も2001年に初めてアラスカ大会に参加した時にスノーシューイング競技で同じような光景を目にしました。年齢や競技能力によって選手をクラス分けするディビジョニングや、出場者全員を入賞者として表彰するシステムも他の競技大会との大きな違いですね。

有森　伊藤先生はSONとは2001年からの関わりで、私よりも1年先輩ということになります。現在はSONの理事を務められていますが、どのような経緯で関わることになったんですか。

伊藤　その当時、障害者とのコミュニケーションを研究する国際学会で日本代表の理事に就いていまして、その学会の中にスペシャルオリンピックスでヘルシー・アスリート・プログラム(※)の国際マネージャーを務める方がいらっしゃいました。その方が日本に国際大会でのボランティアの協力を求めてきて、私も聴覚検査のチームに加わることになったんです。

有森　ヘルシー・アスリート・プログラムもスペシャルオリンピックスならではの取り組みです。知的障害者の中には、眼のかすみや歯の痛みなど細かな体調の変化を周りに上手く伝えられない方もいます。悪いところが放ったままになってしまわないように、こうしたスポーツ大会を通じて病院に近い診察を受けられるのはとても価値の大きいプログラムと言えます。

伊藤　そうですね。良い体調で競技に臨めば記録も上がるかもしれない。そういう好影響もあると思います。

有森　世界大会と国内大会を合わせて毎年一度は大きな大会があるので、アスリートに健康状態を整える機会を定期的に提供できている。そういうこともスペシャルオリンピックスの大きな役割のひとつで、知的障害者の生活の質の向上を社会全体で考えるきっかけにもなっています。まだまだジョインしてくださるドクターの方は足りないんですか？

伊藤　毎年たくさんの方々がボランティアとして参加して下さっていますが、それでもドクターだけでなく我々のようなパラメディカルの手も足りていないというのが実情ですね。

◆知る機会を生む ユニファイドスポーツ

伊藤　SONでは「ユニファイドスポーツ」の普及にも力を入れています。今年は「ユニファイドスポーツ元年」をスローガンに掲げて、改めて活動を強化していくそうですね。

有森　はい。知的障害のあるアスリートと知的障害のないパートナーが同じフィールドで競技を楽しむのがユニファイドスポーツの取組です。チームスポーツがわかりやすいので、まずはサッカーやバスケットボールに力を入れており、現状ではプレーヤーデベロップメントに基づいたプログラムが最も広がりを見せています。

伊藤　ユニファイドサッカーではサッカー元日本代表の北澤豪氏にも協力してもらい、シカゴでの大会にも来ていただきました。

有森　日本サッカー協会やJリーグの皆さんとも関係を築きながら、世界大会の前には日本代表チームの指導をお願いしたりしています。競技性の高いユニファイドサッカーを実施できているのは各都道府県の地区の中でもまだまだ少数ですが、近い将来までに全国に普及させていきたいです。

伊藤　今ではいろんなところで「共生」という言葉を聞きますが、まさにユニファイドスポーツを推奨していくことが、共生社会の実現を促すことにもなりますね。

有森　そうですね。実は2018年、スペシャルオリンピックス国際本部の創設50周年を記念して、発祥地のシカゴでユニファイドサッカーの世界大会が行われたのですが、そこでも共生という言葉を意識することがありました。この大会には日本からも福島のチームが出場していたのですが、その中に兄弟で参加しているプレーヤーがいたんです。お兄さんがアスリートで弟さんがパートナー。チームを組む以前からお兄さんはスペシャルオリンピックスの選手として活躍していて、ユニファイドサッカーを始めることになって、弟さんも参加を決めました。一緒にプレーするまで弟さんはお兄さんを理解できないところがあって、集団の場でも周りを気にして何となく声をかけるのを躊躇してしまうこともあったといいます。それが競技を通じて、今まで知らなかったお兄さんの一面に気付き、コミュニケーションの取り方も変化したそうです。

伊藤　本来なら一番身近な理解者のはずなのに、兄弟といっても正面から向き合うのは難しかったのだと思います。それが一緒に競技をする中で向き合えた。スポーツの場を通じて、障害のある方とない方がいろいろなことに気付き、学ぶことができれば真の意味での共生社会の実現にもつながっていくはずです。

有森　スペシャルオリンピックスもユニファイドスポーツも共通しているのは、参加者みんなが「知る機会」を共有できることで、その中ではボランティアの方々も主役です。世界大会の開催には100人ほどのアスリートに対して3,000人のボランティアが必要になるのですが、2005年に長野で世界大会が行われた時にはそれだけの人数を集めるのにとても苦労したそうです。そこで企業に協力をお願いしてまわり、各社5人くらいずつボランティアを出していただいたところ、大会から帰ってきた社員がものすごく優しくなったと大きな反響があったといいます。今では何百人規模のボランティアを出していただいている企業もあり、スペシャルオリンピックスで得た機会が貴重な学びに変わっていることを示す実例になっています。

伊藤　本学でも健常者のチームと知的障害者のチームとで交流試合を積極的に行い、2月にふじみ野キャンパスの野球場で女子ソフトボールの試合を予定しています。チーム同士の対戦なので今はまだユニファイドスポーツとは言えませんが、そこに向けた第一歩と捉えています。

有森　これからスポーツの舞台で指導者になる若い学生たちに共生の場を設けていくことも大切ですね。実際にSONと提携してユニファイドスクールとして先進的な取り組みを始める大学も出てきました。まだ試験段階ではありますが、そうした環境を作っていくことも我々の課題であり目標であると感じています。

◆特別が「当たり前」になる社会へ

伊藤　「気付き」という面で言うと、私は2005年の長野で行われた国際大会で遭遇した光景が強く記憶に残っています。大会中、ある開発途上国から来た選手たちの聴覚検査をする機会があったのですが、その中に配線が切れていたり、電池切れになった補聴器をそのまま使っている人たちがいました。さらにはその会場で補聴器を装着してみて、生まれて初めて人の声を聴いたという方にも出会いましたね。そういう方々にはメーカーが援助してくれた補聴器を無償で提供することもあるのですが、そうすると今度は彼らの国では補聴器用の電池が買えないという問題が出てきました。結局、その大会では袋いっぱいの電池を持たせましたが、それがメーカーにとって貴重な気付きになって、その後、太陽光で充電可能な補聴器が開発されることになりました。

有森　補聴器を作る側と使う側、両方にとって気付きのある場になったということですね。

伊藤　大会全体を通してみれば小さなことかもしれませんが、障害者と健常者の間にある溝もお互いの努力や心がけがあれば埋めていけるという例だと思います。そして、いろんな人の努力を集め、特別なことが当たり前になる環境こそ共生社会なんだと私は思います。我々の関わっているスペシャルオリンピックスも今は「スペシャル」と付いていますが、障害者スポーツへの理解がより一層進んだ末に、いずれ特別なことが特別ではなくなる時が来るかもしれませんね。

◆互いを知ることで実現する共生社会

伊藤　障害のある人は、必ずしも障害のない人と同じことができるようになる必要はありません。最新のテクノロジーで補完できることも増えています。しかし、障害のある人とない人とが互いのことを知らなければ、共生社会の実現はできません。「ユニファイドスポーツ」が日本でもっと盛んになって、お互いを理解するということをスポーツを通して気付くことがとても大切だと思います。まずは、大学という場で、スポーツを通してお互いを知り合う機会が提供できれば、こんなに素晴らしいことはありません。

（※）ヘルシー・アスリート・プログラム（HAP／ハップ）
競技大会期間に行われる健康とヘルスケア向上のためのプログラム。眼の健康、口腔、聴力、栄養・生活習慣、筋力・柔軟性、足の健康チェックの6つの部門で専門家の検診が受けられる。

＜文京学院大学について＞
1924年、創立者島田依史子が島田裁縫伝習所を文京区に開設。教育理念「自立と共生」を根源とする先進的な教育環境を整備し、現在は、東京都文京区、埼玉県ふじみ野市にキャンパスを置いています。外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部、大学院に約5,000人の学生が在籍する総合大学です。学問に加え、留学や資格取得、インターンシップなど学生の社会人基礎力を高める多彩な教育を地域と連携しながら実践しています。
本レターでは文京学院大学で進む最先端の研究から、社会に還元すべき情報を「文京学院大学オピニオン」として提言します。